あとがき

日本環境教育学会では毎年大会において“環境教育をどう把えるか”といったテーマでシンポジュウムが開かれています。本年は甲南大学で行われ「文明と環境」というテーマで提言と討論がなされました。これに先立ち大阪大学名誉教授中川米造博士による「健康と環境」という基調講演がなされました。この二つのテーマの内容で共通していることは、病気も環境問題も文明病であるということです。健康を環境教育に、病気を環境問題と対比して考えてみると、環境教育の把えにくさがわかります。環境という言葉は健康という言葉同様に抽象的で、何をもって健康であるとするかがわかりにくく、それぞれ人によって把え方が違っています。環境問題は文明の問題であり、環境教育はこれを見直す教育であるという大阪教育大学の鈴木善次教授の考え方もなるほどとうなずける考え方です。

パプアニューギニアに行った人の話ですが、今日食べる食糧を採取したり捕らえたら、たとえそれより上質の食料や獲物に出合っても、今日の食糧はこれで十分だと言ってそれを採(捕)らなかったそうです。人間もこのような生活を続けていたなら環境問題は生じなかったにちがいありません。人間を動物としてのヒトとして考えた場合、するどい爪も牙も持っていないし、消化管のつくりや消化酵素などから総合して、本来的には木の実や草の実を食べる草(植)食動物であるといえます。本来的にはおとなしい動物であるヒトが強大な武器や道具を使うようになって食べ物や住む場所など物質面の生活ばかりでなく精神面までも変容してしまったようです。もう一度、人間は動物学的なヒトの原点に立ってやさしい生活様式を考え直す時期に来ているように思われます。

環境教育は多様なそれぞれの立場のあることを認識し、それぞれの立場に立って他を思いやり行動できるような人間の育成を意図しています。その行動は自発性・無償性・公共性といったボランティア精神に則ったものであって欲しい。

今回の大会のサテライトシンポジュウム、ワークショップ、それに一般講演のテーマを見ても環境教育は多様であることがわかります。編集委員会としてもこれに対応できるように柔軟な姿勢で臨みたいと努力しておりますので、投稿などご協力ご指導の程お願いいたします。

山田卓三

編集委員
委員長　山田　卓三
加藤　憲一
金森　正臣
狩山　廣子
北野日出男
木俣美樹男
鈴木　善次
杉浦　嘉雄
東原　昌郎
米田　　健